

文

化

舞台芸術の世界で、肉体を酷使し、時には明らかに物理的な「痛み」を伴うような表現手法が強烈な印象を与える作品が相次いでいる。そういった作品の多くは演劇とも舞踊ともつかない独自の世界を築いていて、「物語」とは別種のリアリティーを紡ぎだしている。

かわらるを素足でける

「十名様限定密室ART PERFORMANCE」や、「野外震撼スペクタクル」といった作品で、観客をも巻き込んだ表現を追究してきたAGUAGALALAが九月三、九、十日に東京・湯島聖堂境内で上演した新作が「VALIS IN THE EVICTIM」。「危機共感ムーブメント」と副題されている。

観客は「一般」と「体験者」に分かれ、各回十数人が「体験者」になって「出演」する。「一度越えたと思ってもすぐにまた壁が立ち上がり、それを越えてもまた新たな壁が現れるといった無限連鎖のなかで、もがき苦しむ人類の姿を表現したい」と主宰のARISAKAが語るように、この作品では文字通

文化部 堤篤史

「苦痛」が大きなモチーフとなっている。

境内の石畳の上を走り回り、突然倒れるような動きや、地面に並べられた割れたかわらをも素足で飛びはいたり。客席がステージ部分を見下ろすような位置にあるため、出演者の足先までよく見えるが実に痛そうだ。「体験者」も例外ではなく、手加減こそしているようだが出演者に突き飛ばされたりする。「苦痛」を表現するのに本当に痛くして見せるのは、単純と言えば単純な方法論だが、奇妙なリアリティーがある。

大阪を拠点に活動する劇団態度が九月二十、二十一日に東京芸術劇場で上演し、十月二十四日には愛知県芸術劇場でも上演する「ダ・キ・シ・メ・タイ!!」も、肉体の存在感を前面に押し出した作品だ。同劇団は「障害

者の身体そのものに最大の表現力がある」という理念のもと、身体障害者のみで結成された。主宰する金満理自身も幼少のころボリオに感染した重度の身体障害者で、車いす生活を送っている。

感情爆発のせりふ  
同劇団の作品のなかで常に大

きな役割を担っているのが「悪意」など一般的にネガティブなものとしてとらえられている感情だ。金は「社会的に受け入れられやすい感情より、隠してしまいがちな部分を表に出すことで、あらゆる側面を持った人間存在を肯定したい」と語る。

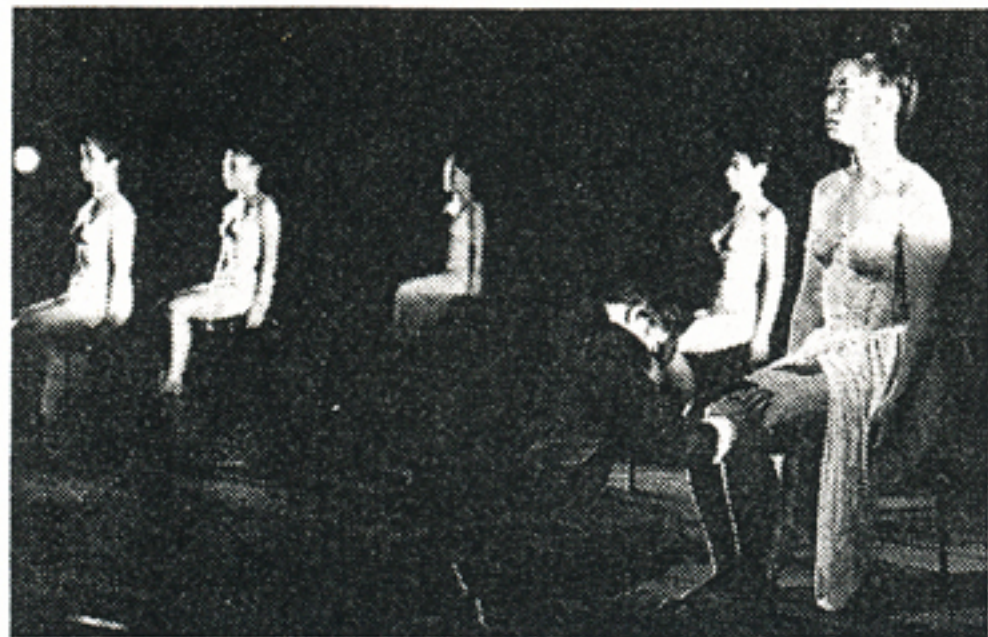
劇団態度の舞台にはストーリーらしいストーリーはほとんど

痛い演劇観客に鮮烈さ

苦しみ・根源的な美表現

「鍛錬された、キレイな体ではない肉体の、根源的な美しさを感じたい」という。同劇団は結成以来、空間と身体にこだわり続けてきた。これまでに俳優がパフォーミングしながら移動し、それにつられて観客も歩きながら見る「野外移動演劇」といった特異なスタイルの作品を発表している。本作は今年二月に同劇団のアトリエ「本郷DOK」で発表された作品を劇場用にリニューアルしたものだ。同劇団は二十四日まで浅草フランス座で「オルギア」という作品も上演している。

「鍛錬された、キレイな体ではない肉体の、根源的な美しさを感じたい」という。同劇団は結成以来、空間と身体にこだわり続けてきた。これまでに俳優がパフォーミングしながら移動し、それにつられて観客も歩きながら見る「野外移動演劇」といった特異なスタイルの作品を発表している。本作は今年二月に同劇団のアトリエ「本郷DOK」で発表された作品を劇場用にリニューアルしたものだ。同劇団は二十四日まで浅草フランス座で「オルギア」という作品も上演している。



劇団解体社の舞台では、平手打ちにされた太ももが内出血寸前にまでなる(撮影・宮内勝)

障害者力演、観客参加劇も「物語」超えた魅力



ンが繰り広げられる。金の俳優への指示は「もっと激しくだ。」「障害者はいたわるべきだ」という常識を転倒し、その分自らが「障害者である」ことを受け入れ、力強く存在をアピールしているようだ。

「痛い」という点では劇団解体社が九月十三、十四日に東京芸術劇場で上演した「THE PROSCENIUM」でも、もっとも強烈な印象を与えるのが冒頭のシーン。コルセットで体を拘束された女性が六人いすに座っている。背広に身を固めた男がゆっくりと舞台に現れ、いきなり一人の女性の背を平手で打ちつける。

「THE PROSCENIUM」でも、もっとも強烈な印象を与えるのが冒頭のシーン。コルセットで体を拘束された女性が六人いすに座っている。背広に身を固めた男がゆっくりと舞台に現れ、いきなり一人の女性の背を平手で打ちつける。

「THE PROSCENIUM」でも、もっとも強烈な印象を与えるのが冒頭のシーン。コルセットで体を拘束された女性が六人いすに座っている。背広に身を固めた男がゆっくりと舞台に現れ、いきなり一人の女性の背を平手で打ちつける。

これらの舞台表現に共通するのは、いわばノンフィクションの魅力だ。演じている内容が信じられなくても、俳優が立ち、肉体を酷使しているという事実が確かである。虚構によってリアリティーを築くのが演劇なら、そこに「本当のもの」を求め出してしまおうのはいわば反則かもしれない。だが、これらの作品には凡百の物語を超え、あらがいがたい魅力に満ちている。このこと自体が現在の演劇を取り巻く状況を反映しているようだ。